

シンポジウム「早生樹最前線！」を開催して

松村順司

平成 23 年 9 月 30 日（金）に、九州大学国際ホール（箱崎キャンパス）において、シンポジウム「早生樹最前線！」が木材学会「組織と材質研究会」、日本木材加工技術協会九州支部のダブル主催で開催されました。

本シンポジウムでは、早生樹を取り巻く一連の研究の有機的な関係の重要性がわかるよう、育種・育林・材質・利用の各分野の最前線の研究成果が紹介されました。大学・企業・県・研究所・学生による活発な議論が行われ、それぞれの立場から早生樹を考える機会が提供されたと思います。

さらには、様々な見解がある早生樹（広葉樹）の未成熟材について、生物学的な視点（形成層の未成熟をどう考えるか？）と、実用的な視点（利用目的に合った性質が安定するところはどこか？）からの見解が示され、有意義な議論が展開されるとともに、新しい学問領域の予感を匂わず展開となり、大盛況の中で幕を閉じました。

参加者は大学教員 22 名、企業 16 名、県関係 11 名、研究所 6 名、学生 26 名の計 81 名と、当初の見込みより多数の方々に参加していただきました。

育種最前線では、磯田圭哉氏が「アカシアの育種とハイブリッド化技術の開発」について講演し、インドネシアのアカシアを中心にこれまでの育種研究の成果と今後の課題を述べた。また、同氏らのグループが開発した簡便で効率的な交配技術が紹介され、技術者の熟練が不要な方法として普及することが期待される。

育林最前線では、横尾謙一郎氏が「日本の早生樹～センダンの育成技術の開発」について講演し、これまで熊本県で取り組まれてきた早生樹育成研究の概要を述べた。特に同氏が深く関わったセンダンの

育成技術が紹介された。スギの伐採跡地にスギ以外の樹種も植えたいとの要望が多いようで、参加者との活発な議論が展開された。

材質最前線では、筆者を含めた 3 名から講演があった。まず、児嶋美穂氏は「海外の早生樹～ユーカリ、アカシア」について講演し、インドネシアとブラジルでの研究成果を紹介した。また、木部繊維長の安定時期は、形成層齢または直径に依存するとし、樹種によって異なること、緯度・気候区分によって異なることが紹介された。

次に、石栗太氏は「海外の早生樹～ファルカタとメルクシパイン」について講演し、インドネシアでの研究成果を紹介した。また、容積密度や道管分布数を指標に、形成層齢と直径の視点から材の成熟に関する見解を示した。

材質最前線の最後は筆者が「日本の早生樹～センダンとチャンチンモドキ」について講演し、日本産早生樹の可能性を示した。また、様々な方々が使う“未成熟材”という言葉を生生物学的な視点と実用的な視点に分けるべきだとの見解が示された。

利用最前線では、村田功二氏が「木質複合床の利用とサステナブル材料利用への企業の取り組み」について講演し、各企業の具体的な取り組みが紹介された。また、用途に応じた適切な樹種の選択、持続可能な森林経営で生産された木材の利用の必要性を述べ、早生樹材を単に利用するだけでなく、育種・育林にも積極的に関与して産業活動を展開することが望まれるという本シンポジウムの主旨に沿った言葉で締めた。

最後になりますが、本シンポジウムの準備・進行に協力していただいた木質資源科学研究室の学生全員に感謝の意を表します。



冒頭の挨拶（森林総研関西支所 藤井智之氏）



材質最前線 2（宇都宮大学 石栗太氏）



育種最前線（森林総研林育セ 磯田圭哉氏）



材質最前線 3（九州大学 松村順司氏）



育林最前線（熊本県林研指導所 横尾謙一郎氏）



利用最前線（京都大学 村田功二氏）



材質最前線 1（名古屋大学 児嶋美穂氏）



最後の挨拶（九州大学 小田一幸氏）

（まつむらじゅんじ：九州大学大学院農学研究院）